読書

「術数学の思考」

著者の武田 時昌さん

「白黒はっきりしないグレーな部分に人生の悩みはある。中国哲学は、悩みを解決する一助になるかも」と語る武田時昌さん（京都市左京区）

本を語る

中国科学の起源探る

古代中国人による自然観の変遷、暦や医薬にどう向き合ってきたかといった科学思想の生成過程をたどり、紀元前から現代にまで引き継がれる中国固有の生き方や文化、伝統の構造を解き明かそうと試みた1冊だ。

著者の京都大人文科学研究所教授・武田時昌さんは、1970年代半ばに京大工学部で核融合を学んだ。「工学部では恩師にもお世話になったが、当時の最先端科学からは人間味が感じられなかった。この技術を商品化しても人の心を豊かにできるのだろうかと悩んだ」といい、卒業後に文学部に学士入学。古典にロマンを感じていたこともあり、湯浅幸孫教授の門をたたいて中国哲学史を専攻した。

「術数学」とは、「易学」を中核とした占術と数学、天文暦学、医薬学といった自然科学が溶け合う中国特有の学問分野。鍼灸の解説書『黄帝内経』の前身など、科学資料の発掘が1970年代以降に相次いだ。中国科学の起源は少なくとも200年程度はさかのぼり、戦国時代へ。本書は主に、紀元前3世紀前後からの約600年（先秦～後漢）を扱う。「治療に鍼を用いる独自の発想にも驚いた」

「先端科学が排除した仙人になる方法、長生術…などあやしげな世界」も、中国科学が包括していた時代だ。節分の恵方巻きが示す方角の吉凶など、根拠は伝わらないままに今なお暮らしの中に残る風習もある。

老荘思想が中心だったが、儒家が巻き返して科学を政治思想に組み入れ、清末まで続く中国独自の思考を形作った。「明末清初の儒学者・黄宗羲は、西洋の最新知識をふりかざす宣教師にも『われわれには易学がある』と動じない。この揺るがぬ自信の根拠も知りたかった」

中国科学史で英国には巨人ジョセフ・ニーダムの業績が、京大では藪内清、吉田光邦、山田慶児氏らの系譜が知られる。山田氏らの指導を受けた武田氏の次の課題は、日中韓3国の研究者間の交流の深化だ。さらに現代人の健康や日常生活を、中国の伝統的な考え方も活用して見つめ直し、「より豊かに生きる知恵にできないか」と思索を深める。

（「術数学の思考」は臨川書店・3240円）

たけだ・ときまさ　1954年大阪府生まれ。中国科学思想史。信州大助教授などを経て現職。編著書に「術数学の射程」「陰陽五行のサイエンス」（いずれも京都大人文科学研究所）など。